

報恩講の歴史とこころ

報恩講のはじまり

永仁2（1294）年、親鸞聖人の33回忌に際し、聖人の曾孫にあたる本願寺第3代覚如上人は『報恩講私記』を撰述されました。聖人のご命日にこのご文を拝読し、報恩感謝の想いを表されたのです。これが「報恩講」のはじまりです。

『報恩講私記』は『報恩講式』ともいわれます。「講式」というのは、仏さまや高僧のお徳を讃えるために書かれた文章です。漢文で書かれ、拝読する時は読み下すという原則があります。覚如上人はそうした伝統的な形式にのっとり、親鸞聖人のお徳を讃えられたのでした。

覚如上人は『報恩講私記』の中で、親鸞聖人のお導きによって阿弥陀如来のご本願をお聞かせいただいたことへのよろこびを述べておられます。そして、「おのおの他力に帰して仏号を唱へよ」と、本願他力のみ教えに帰依してお念仏申しましょと勧められました。私たちも、このお示しを実践したいものです。

蓮如上人と報恩講

報恩講は当初、親鸞聖人の毎月のご命日に

お勤めされていましたが、本願寺第8代蓮如上人の頃から、年に一度、祥月命日にかけての七昼夜お勤めする方式になったようです。

これを「御正忌報恩講」といいます。

蓮如上人はその御正忌報恩講に参詣する人々のありさまをご覧になって、「信心を得た人もいるが、不信心の者もある」と述べておられます（『御文章』五帖目第十一通、御正忌章）。鋭いご指摘ですね。そして、「信心を得ていない人はすみやかに信心をいただかなければなりません」とお示し下さいました。

一宗の繁昌というのは、人が多く集まることではない、一人でも信心を得ることだ、との蓮如上人のお言葉も伝わっていますが（『蓮如上人御一代記聞書』第一二一条）、浄土真宗においては、ご信心をいただくということが何より大切なことです。報恩講に参らせていただき、親鸞聖人が説かれた肝要、他力信心のおいわれをよくよくお聞かせいただきましょう。

ご恩がわかる人に

おかげさま

報恩講—先人たちは、真宗で一番大切な法要を、「ほんこさん」と呼んで親しんできました。



散華

「子どもの頃、お寺のほんこさんには屋台が並び、飴やおもちゃに大はしゃぎしたものです。何より、てんこ盛りのご飯に沢山のご馳走、果物まで添えられたお齋が楽しみで。屋台やご馳走目当てでしたが、今思えば、ほんこさんのご縁に、おかげさまをお教えたいただいたんですね」

こう話すご門徒さんは、幼い日の思い出とともに、報恩の心を「おかげさま」と喜んでおられます。

如来大悲の恩徳は 身を粉にしても報ずべし

師主知識の恩徳も ほねをくだきても謝すべし

（『浄土真宗聖典』註釈版第2版）

「恩徳讃」には、阿弥陀さまと、浄土の教えを示してくださった方々の導きに、返して

も返し切れないご恩の想いが讃えられます。
私たちが生死の迷いを超える身とならせてい
ただけるのは、阿弥陀さまのお慈悲のおかげ
であり、お念仏のみ教えをあらわされた親鸞さ
ま、み教えを伝えてくださった人々のおかげな
のです。

ありがとうございます？

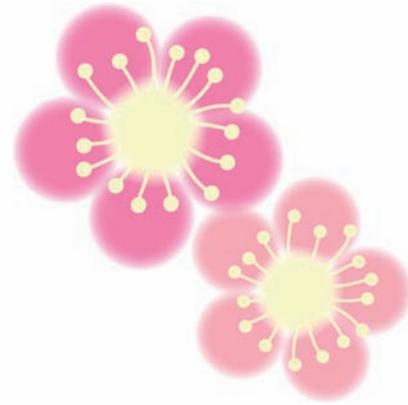
あるお父さんが、子どもの誕生日にプレゼン
トをしました。ずっと欲しがっていたおもちゃ
を前に、子どもは嬉しくてはしゃいでいま
す。その子どもに、「ありがとうございます？」とい
うお父さん。何も見返りを求めているのではあり
ません。お礼の言える人になってほしいとの願
いを、子どもにかけているのです。

同じように、阿弥陀さまは「ご恩を喜ぶ人とな
っておくれ」と、私に願いをかけてくださっ
ています。

「ありがとう、おかげさま」とお礼のできる
ことほど、豊かな心はありません。お礼ができ
ないのは不足がある証拠で、寂しい姿ではない
でしょうか。

以前、人間に一番見えないものは、自分の内
面とご恩である、と聞きました。阿弥陀さま
は、そんな私の心を照らし出し、真実の方向へ
と導いて下さいます。そのご恩を思うと、頭が
下がり、お礼申さずにおれなくなります。

お寺で、家庭のお仏壇で、報恩講をお勤め
し、ご恩をよろこばせていただきましょう。



連絡先

©監修 本願寺仏教音楽・儀礼研究所

報恩講

親鸞聖人伝絵



稲田禅房西念寺蔵